

日蓮大聖人御書全集

みさわしろう

三沢抄

新版
2010
ゝ
2015

三沢抄

けんじ

ねん

がつ

にち

さい

みさわどの

建治 4 年 ('78) 2 月 23 日

57 歳 三沢殿

こうじいっぴやく

川 海 苔

於 胡 とう

種 々 もの

柑子 一百・こうのり・おご等のすずの物、はるばるとわ

さんちゆう

送

た

そうろう

内 房

あま

ざわざ 山中へおくり給びて候。ならびにうつぶさの尼

御 前

おん 小 袖 ひと

た

そうら

お

ごぜんの御こそで一つ、給び候い了わんぬ。

仰

見 解

そうろう

さては、かたがたのおおせ、くわしくみほどき候。

ぶつぼう

学

もの

だいじみじん

多

そもそも、「仏法をかくする者は大地微塵よりおおけれど

ほとけ

成

ひと

そうじよう

ど

少

も、まことに仏になる人は爪上の土よりもすくなし」と、

だいかくせそん

ねはんぎよう

確

説

たま

そうら

にちれん

大覚世尊、涅槃経にたしかにとかせ給いて候いしを、日蓮

見

そうら

みまいらせ候いて、いかなれば、かくはかたかるらんと

難

勘

そうら

思

そうろう

かんがえ候いしほどに、げにもさるらんとおもふこと候。

ぶつぼう

学

わ

こころ

愚

仏法をばくすれども、あるいは我が心のおろかなるに

ちえ

賢

し

より、あるいはたとい智慧はかしこきようなれども、師に

わ

こころ

曲

知

ぶつきよう

直

習

よりて我が心のまがるをしらず、仏教をなおしくならい

得

難

みようし

じつきよう

あ

たてまつ

うることかたし。たとい明師ならびに実経に値い奉つて

しょうほう

得

ひと

しょうじ

出

ほとけ

正法をえたる人なれども、生死をいで仏にならんとする

とき

かげ

み

添

あめ

くも

時には、かならず影の身にそうがごとく、雨に雲のあるが

さんしょうしま

もう

なな

だいじしゅつげん

辛

ごとく、三障四魔と申して七つの大事出現す。たといから

くして六つはすぐれども、第七にやぶられぬれば、むつ 過 だいしち 破 ほとけ 仏にな

ることかたし。難

その六つはしばらくおく。むつ 置 第七の大難は天子魔と申すも

のなり。たとい末代の凡夫、一代聖教の御心をさとり、まつだい ぼんぷ いちだいしようぎよう みこころ 覚

摩訶止観と申す大事の御文の心を心えて、まかしかん もう だいじ おんふみ こころ 得 ほとけ 成 仏になるべき

になり候いぬれば、第六天の魔王、このことを見て驚いそうら だいろくてん まおう み おどろ

て云わく「あらあさましや。この者、この国に跡を止むるい 浅

ならば、かれが我が身の生死をいずるかはさておきぬ、ま彼 わ み しょうじ 出

た人を導くべし。またこの国土をおさえとりて、穢土をひと みちび こくど 押 取 えど

じようど

浄土となす。いかんがせん」とて、欲・色・無色の三界の一切

けんぞく

催

おおくだ

い

おのおの

能

々

の眷属をもよおし、仰せ下して云わく「各々のうのうに

したが

ぎようじや

悩

叶

随って、かの行者をなやましてみよ。それになわずば、

でし檀那

こくど

ひと

こころ

うち

い

替

かれが弟子だんなならびに国土の人の心の内に入りかわ

諫

脅

かな

りて、あるいはいさめ、あるいはおどしてみよ。それに叶わ

われ自

打

下

こくしゆ

しんしん

い

替

ずば、我みずからうちくだりて、国主の身心に入りかわり

脅

止

僉

議

ておどしてみんに、いかでかとどめざるべき」とせんぎし

そろう

候なり。

にちれん

前

見

解

そちら

まつだい

日蓮、さきよりかかるべしとみほどき候いて、末代の

ぼんぷ　こんじよう　ほとけ

成

だいじ

そうら

しゃかぶつ

凡夫の今生に仏になることは大事にて候いけり。釈迦仏

ほとけ

たま

きようぎよう

数　多　説

そうろう

の仏にならせ給いしことを経々にあまたとかれて候

だいろうくてん

まおう

だいなん

しの

に、第六天の魔王のいたしける大難、いかにも忍ぶべしと

見　そうら

そうろう

だいばだつた

あじやせおう

あくじ

もみえ候わず候。提婆達多・阿闍世王の悪事は、ひとえ

だいろうくてん

まおう

謀

見

そうら

によらい

に第六天の魔王のたばかりとこそみて候え。まして、「如来

げん

いま

おんしつおお

めつど

のち

の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」

もう

だいかくせそん

おんとき

ごなん

ぼんぷ

み

にちれんとう

と申して、大覚世尊の御時の御難だにも、凡夫の身、日蓮等

もの

かたときいちにち

しの

がようなる者は、片時一日も忍びがたかるべし。まして

ごじゆうよねん

あいだ

しゅじゅ

だいなん

まつだい

五十余年が間の種々の大難をや。まして末代にはこれには

ひやくせんまんおくばい 過

そうろう

だいなん

しの そうろう

百千万億倍すぐべく 候 なる大難をば、いかでか忍び 候

こころ

そん

そうら

しょうにん

みぼう

し

べきと心に存して 候いしほどに、「聖人は未萌を知る」

もう

さんぜ

なか

みらい

し

実

しょうにん

と申して、三世の中に未来のことを知るをまことの聖人と

もう

は申すなり。

にちれん

しょうにん

にほんこく

いま

よ

しかるに、日蓮は聖人にあらざれども、日本国の今の代

くにぼうぼう

予

し

そうら

にあたりて、この国亡々たるべきことをかねて知つて 候い

ほとけ

説

たま

そうろう

めつど

しに、これこそ仏のとかせ給いて 候 「いわんや滅度して

のち

きようもん

そうら

もう

出

後をや」の経文にあたりて 候え。これを申しいだすなら

ほとけ

さ

たま

そうろうみらい

ほけきよう

ぎようじゃ

し

ば、仏の指させ給いて 候 未来の法華經の行者なり。知つ

もう

せぜしようじよう

あいだ

啞

言

吃

てしかも申さずば、世々生々の間、おうし・ことどもり

う

うえ

きようしゆしやくそん

だいおんてき

くに

こくしゆ

と生まれん上、教主釈尊の大怨敵、その国の国主の

だいしゆうてき

たにん

ごしよう

むけんだいじよう

ひと

大讐敵、他人にあらず、後生はまた無間大城の人これな

勘

えじき

責

りとかんがえみて、「あるいは衣食にせめられ、あるいは

ふぼ

きようだい

ししよう

どうこう

諫

こくしゆ

父母・兄弟・師匠・同行にもいさめられ、あるいは国主・

ばんみん

脅

怯

こころ

万民にもおどされしに、すこしもひるむ心あるならば、

いちど

もう

い

年

来

日

来

こころ

戒

そうら

一度に申し出ださじ」と、としごろひごろ心をいましめ候

かこおんのんこう

さだ

ほけきよう

あ

いしが、「そもそも、過去遠々劫より、定めて法華経にも値

たてまつ

ぼだいしん

発

いちなんになん

い奉り、菩提心もおこしけん。なれども、たとい一難二難

しの

だいなんしだい

続

きた

たい

には忍びけれども、大難次第につづき来りければ、退しけ

こんど

だいなん

たい

こころ

もう

い

るにや。今度いかなる大難にも退せぬ心ならば、申し出だ

もう

い

そうら

きようもん

違

すべし」とて、申し出だして候いしかば、経文にたがわ

たびたび

だいなん

遭

そうら

ず、この度々の大難にはあいて候いしぞかし。

いま

いつ 向

だいなん

堪

わ

み

今は一こうなり、いかなる大難にもこらえてんと、我が身

あ

こころ

そうら

ふしん

さんりん

す

に当てて心みて候えば、不審なきゆえに、この山林には栖

そうろう

おのおの

捨

たも

いちにち

み候なり。各々は、またたといすてさせ給うとも、一日

片 時

わ

しんみよう

助

ひとびと

たにん

かたときも我が身命をたすけし人々なれば、いかでか他人

似

たも

もと

われいちにん

われ

にはにさせ給うべき。本より我一人いかにもなるべし。我い

二二二ろ たいてん

ほとけ 成

かにしなるとも、心に退転なくして仏になるならば、

殿 原

みちび

約

束

もう

そうら

とのばらをば導きたてまつらんと、やくそく申して候い

おのおの

にちれん

ぶつぼう

し

たま

うえ

ぞく

き。「各々は日蓮ほども仏法をば知らせ給わざる上、俗なり、

しよりよう

さいし

しよじゆう

かな

所領あり、妻子あり、所従あり。いかにも叶いがたかる

偽

愚

もう

そうら

べし。ただいつわりおろかにておわせかし」と申し候いき

そうろう

ごこと

捨

そうろう

こそ候べけれ。なに事につけてかすてまいらせ候べき。

疎

義 そうろう

ゆめゆめ、おろかのぎ候べからず。

ほうもん

佐 渡 くに

流

そうら

いぜん

また、法門のことは、さどの国へながされ候いし已前の

ほうもん

ほとけ

にぜん

きよう

思

くに

こくしゆ

法門は、ただ仏の爾前の経とおぼしめせ。「この国の国主、

わ よ

持

しんごんしとう

め

あ

たま

我が代をもたもつべくば、真言師等にも召し合わせ給わん

とき

真

だいじ

もう

でしとう

ずらん。その時、まことの大事をば申すべし。弟子等にも

内々 もう

披露

彼

知

ないない申すならば、ひろうしてかれらしりなんず。さら

合

思

おのおの

もう

ば、よもあわじ」とおもいて、各々にも申さざりしなり。

い

ぶんえいはちねんくがつじゅうににち

よ

竜

くち

しかるに、去ぬる文永八年九月十二日の夜、たつの口に

くび

刎

とき

後

不

便

われ

付

て頸をはねられんとせし時よりのち、「ふびんなり、我につ

もの

真

言

思

きたりし者どもにまことのことをいわざりける」とおもつ

佐渡

くに

でし

ないないもう

ほうもん

ほとけ

て、さどの国より弟子どもに内々申す法門あり。これは、仏

のち

かしよう

あなん

りゆうじゆ

てんじん

てんだい

みゆうらく

でんぎよう

より後、迦葉・阿難・竜樹・天親・天台・妙楽・伝教・

ぎしんとう だいろんじ だいにんし し みこころ なか ひ

義真等の大論師・大人師は、知ってしかも御心の中に秘せ

たま くち そと い たま ゆえ ほとけせい

させ給いし。口より外には出だし給わず。その故は、仏制

のたま わ めつご まつぼう い だいほう言

して云わく「我が滅後、末法に入らずば、この大法いうべ

故

からず」とありしゆえなり。

にちれん おんつか じこく 当

日蓮はその御使いにはあらざれども、その時剋にあたる

うえ ぞんがい ほうもん 覚 しょうにん い たも

上、存外にこの法門をさとりぬれば、聖人の出でさせ給う

じよぶん 粗 々 もう

まで、まず序分にあらあら申すなり。しかるに、この法門

しゆつげん しょうほう ぞうほう ろんじ にんし もう ほうもん みな

出現せば、正法・像法に論師・人師の申せし法門は、皆、

ひい のち ほし ひかり こうしょう のち つたな し

日出でて後の星の光、巧匠の後に拙きを知るなるべし。

とき

しようぞう

じとう

ぶつぞう

そうとう

れいげん

みな消

失

この時には、正像の寺堂の仏像・僧等の靈驗は皆きえうせ

だいほう

いちえんぶだい

るふ

見

そうろう

て、ただこの大法のみ一閻浮提に流布すべしとみえて候。

おのおの

ほうもん

契

あひと

頼

思

各々はかかる法門にちぎり有る人なれば、たのもしとおぼ

すべし。

内房

おんこと

おん年寄

たま

おん渡

またうつぶさの御事は、御としよらせ給いて御わたりあ

労

思

そうら

氏

神

りし、いたわしくおもいまいらせ候いしかども、「うじがみ

詣

序

そうら

見

参

い

へまいりてあるついで」と候いしかば、げんざんに入るな

さだ

罪

深

ゆえ

かみ

しよじゅう

らば定めてつみふかかるべし。その故は、神は所従なり、

ほけきよう

しゆくん

しよじゅう

序

しゆくん

見

参

法華経は主君なり。所従のついでに主君へのげんざんは

せけん

恐

そうろう

うえ

あま

おんみ

たま

世間にもおそれ候。その上、尼の御身になり給いては、

ほとけ

先

おん 失

まず仏をさきとすべし。かたがたの御とがありしかば、

見 参

そうろう

あま 御 前 ひとり

限

げんざんせず候。これまた尼ごぜん一人にはかぎらず、

ほか ひとびと

下 部 湯

序

もう もの 数 多

その外の人々も、「しもべのゆのついで」と申す者をあまた

追 返

そうろう

あま

親

おん 年

おいかえして候。尼ごぜんは、おやのごとくの御としな

おん 歎

労

そうら

ぎ 知

り。御なげき、いたわしく候いしかども、この義をしらせ

まいらせんためなり。

殿

一 昨 年

見 参

のち

虚 事

またとのは、おとしかのげんざんの後、そらごとにて

そうら

ご 所 労

もう

ひと

遣

聞

や候いけん、御そうろうと申せしかば、「人をつかわしてきか

もう

ごぼう

もう

ん」と申せしに、この御房たちの申せしは、「それはさるこ

そうら

ひと

鬱

悵

思

とに候えども、人をつかわしたらば、いぶせくやおもわれ

そうら

もう

せけん

習

候わんずらん」と申せしかば、「世間のならいはさもやあ

現

おんこころ

うえ

ごしよろう

おんつか

るらん。げんに御心ざしあるなる上、御所労ならば御使

あ

思

おんつか

も有りなん」とおもいしかども、御使いもなかりしかば、

偽

愚

覚

東

そうら

うえ

むじよう

つね

いつわりおろかにておぼつかなく候いつる上、無常は常の

去年

今年

せけん 法

過

見見

ならいなれども、こぞ・ことは世間ほうにすぎて、みみえ

覚

恋

そうら

まいらすべしとおおぼえず、こいしくこそ候いつるに、御

音

信

嬉

もう

あま

御

前

おとずれある。うれしとも申すばかりなし。尼ごぜんにも、

由

語

もう

たま

そうら

ほうもん

このよしをつぶつぶとかたり申させ給い候え。法門のこと、

書

伝

もう

そうら

こと 久

こまごまとかきつえ申すべく候えども、事ひさしくなり

そうら

止

そうらう

候えば、とどめ候。

ぜんしゆう

ねんぶつしゆう

りつしゆうとう

しょうしyouさき

ただし、禅宗と念仏宗と律宗等のことは、少々前に

もう

そうらう

しんこんしゆう

殊

くに

唐 土

亡

も申して候。真言宗がことにこの国ととうどとをばほろ

そうらう

ぜんむいさんぞう

こんごうちさんぞう

ふくうさんぞう

こうぼう

ぼして候ぞ。善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・弘法

だいし

じかくだいし

ちしようだいし

ろくにん

だいにち

さんぶきよう

大師・慈覚大師・智証大師、この六人が大日の三部経と

ほけきよう

ゆうれつ

めいわく

さんさんぞう

じ

てんじく

法華経との優劣に迷惑せしのみならず、三三蔵、事をば天竺

寄

りようかい

造

出

おうわく

さんだいし 打

によせて両界をつくりいだし、狂惑しけるを、三大師うち

抜

にほん

習

渡

こくしゅ

ばんみん

伝

ぬかれて日本へならいわたし、国主ならびに万民につたえ、

かんど

げんそうこうてい

よ

亡

にほんこく

漸

衰

漢土の玄宗皇帝も代をほろぼし、日本国もようやくおとろ

はちまんだいぼさつ

ひやくおう

誓

破

はちじゅうにだい

えて、八幡大菩薩の百王のちかいもやぶれて、八十二代

おきのほうおう

よ

あずま

取

たま

さんだいし

隠岐法皇、代を東にとられ給いしは、ひとえに三大師の

だいそうとう

祈

げんじやくおほんにん

そうろう

かんとく

大僧等がいのにしゆえに、還著於本人して候。関東はこ

あくほう

あくにん

たいじ

じゅうはちだい

継

ひやくおう

の悪法・悪人を対治せしゆえに、十八代をつぎて百王に

そうろう

そうら

あくほう

もの

ごきえ

て候べく候いつるを、また、かの悪法の者どもを御帰依

いつこく

しゅ

ほんんしやく

にちがつ

してん

おんはか

あるゆえに、一国には主なければ、梵釈・日月・四天の御計

たこく

仰

付

脅

ご

覧

らいとして、他国におおせつけておどして御らんあり。ま

ほけきよう ぎようじや

遣

おん 諫

怪

た法華經の行者をつかわして御いさめあるをあやめずし

か ほつしとう こころ

せけん しゅつせ せいどう

破

て、彼の法師等に心をあわせて世間・出世の政道をやぶり、

ほう 過 ほけきよう おん 敵

たも とき 過

法にすぎて法華經の御かたきにならせ給う。すでに時すぎ

くに 破

ぬれば、この国やぶれなんとす。

疫 病

戦 先 符

負 徴

やくびようは、すでにいくさにせんぷせん。まくるしるし

浅

なり。あさまし、あさまし。

にがつにじゅうさんにち

にちれん かおう

二月二十三日

日蓮 花押

三 沢 殿

みさわどの

駿 河 ひとびと

おな みこころ もう

たま

かえすがえす、するがの人々、みな同じ御心と申させ給

い
候え。
そうら